

---

# すべてが死んだ牛になる -The Imperfect Outsider-

久木 秋啓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

すべてが死んだ牛になる - The Imperfect Outhsider -

### 【ZPDF】

N4224M

### 【作者名】

久木 秋啓

### 【あらすじ】

ある日、マニアックな映画を上映している高田馬場の映画館を訪れた「俺」は、奇妙な現実にさまでしまい……。

日常とのわずかなズレを描いたSF。

某月某日の日記より。

この前、高田馬場の某映画館に行つたら、不思議な体験をした。誰かに話すのもあれだし、日記に書くくらいが一番いいのだ、きっと。

そこは、いわゆる名画座といつやつで、普段は一日一本、むかし公開されていた映画を上映するような映画館。たまたま「シユルレアリストと映画」というテーマで、好きなダリの映画なんかをオーラナイトで上映する、という情報を発見して行つてみた。ほんと、滅多にない機会だと思つたので。

夕方頃に映画館について、その日の上映作品なんかの書いたパンフレットを受け取つて、席に着く。ガラガラかと思っていたけど、何人かちゃんと入つている。ここのらへんはさすが東京だなと思う。

ちなみに映画を見る時は基本、一番前の席に座ることにしている。中身によつては気持ち悪くなつたりするし、『マクロスF』の時は画面の端が見えなかつたりしたけど。バカの一つ覚えのように、真ん前に座つている。今回もそう。いくつか離れた席におつさんが一人座つっていた。眼鏡にヒゲに長い髪をたばねて、という『氣合』いの入つてゐる人つぽかつた。

で、ブニュエルの『氣狂いピエロ』という有名な作品からスタート。タイトルは知つてたけど、見たことなかつたので、これは普通におもしろかつた。こんな感じの内容なんやね、と。

その次にあつたのが、ダリとブニュエルが共同監督した『アンダルシアの犬』。個人的な趣味で何回か見てたし、学校の授業でも見ていた。グロかつたり、意味不明だつたりするけど、かなり好きな作品。

最初に違和感を感じたのは、その時だ。

男がピアノにひもをつけて引っ張るシーンで、ピアノの上に死んだ口バが一頭のせあつたと思つていたんだけど、それが「死んだ牛」だつた。

はて、と思つた。ダリは他にも「腐った口バ」とか描いてたから、口バだと思つてたんだけど、どうやら記憶違いだつたらしい。

そういうしているうちに映画は終わり。「いやー、いい映画だつた」とか思いつつ、パンフレットを確認してみて、びっくりする。

『デューン 砂の惑星』（監督アレハンドロ・ホドロフスキー）

が、最後の演目となつていたのだ。

何に驚いたかといつと、この映画、存在しないはずの映画だつたのだ。

最初、このホドロフスキーといつ監督が担当する予定だつたが、資金繰りが苦しくなつたか何かで、デヴィッド・リンチといつ監督に交代した、つて話だつたはず。

ホドロフスキーが監督する予定だつたほの『デューン』は、デザインをダン・オバノン（『エイリアン』とか『バタリアン』の）が担当し、音楽をピンク・フロイド、さらに役者としてサルヴァドール・ダリが登場する、といつことで、俺にとつては最高の布陣になるはずだつた。未完になつたのが、残念でならないと思つていたが、なんで、これがいま上映されるのか。

パンフレットを良く読むと「撮られていた映像を繋ぎあわせて作られた非公開版」が存在していた、といつことで、それが上映されるらしい。それってありなんか！？と思つたけど、正直、めっちゃ嬉しくて興奮していた。

メキシコあたりの砂漠を飛行するロクレジットに、ピンク・フロイドの「トゥーン」という沈み込むような深いギターの音色が

重なった瞬間にもう涙が出た。そこから先はもう奇想天外な映像世界。未完成作品なので、まあ、ストーリーが繋がらない。普通、カットするようなシーンももつたないからつっこんだみたいで、テンポも悪い。効果音とかはさすがに適当だし、音のないシーンまであつたりする。

それでも、最高の映画だと思った。

で、いよいよ待ちかねていたダリが登場した。不思議な服装だし、奇抜なメイキアップだし、これダリじゃなくてもいいんじゃねーのかと思つたけど、かつと見開いたあの目で、ダリだとはつきり分かつた。

にやり、とこひちを向いて笑うショットでは、ちょっと背筋がぞくつとした。実際に、目があつたくらいの錯覚を感じるくらい。動くダリを見たのは、2回目くらいで、なにしろ一番尊敬する画家なので、妙に感動してしまつた。

そういうしているうちに、映画は終わってしまった。途中でばつさりと切られる感じね。最初から最後まで、なんかもういかがわしさ満載のフィルムだつた。

そこまでなら、まあ普通にいい話で終わるのだが。その後が少し……。横のほうに座つてた、おっさんが俺の興奮しているのに気づいたのか、にやにやしながら話しかけて來た。

オールナイトの上映も、ちょうどそれがラストで、劇場を出ようとしている時だつた。

「デューン、はじめて見たの？」

みたいな感じで声を掛けられた。

相当映画好きの人らしくて、俺のような生半可な知識ではついていけないような雰囲気だつた。正直、あんまり初対面の人と話すのは嫌なので、逃げようかと思つたけど、仕方なくしばらく雑談した。まあ、人の良さそうな感じではあつたし。

が、その人との会話が妙に噛み合わない。バー・ホーベンとリンチが共同監督した『スターウォーズ』も酷かった、とか言つわけだ。

バー・ホーベンというのも変わった監督で、ジョージ・ルーカスに『スター・ウォーズ』の監督をしないかと打診されたものの、結局、『スター・ウォーズ』はやらなかつた。はずなんだが。

デヴィッド・リンチのほうも、『スター・ウォーズ』をやらないか、と言われたけど、それを断つてホドロフスキイがやり残した『デューン』を監督した。はずだつたのだが。

だいたい、どちらも個性が強すぎる制作者同士らしいので、一緒にやれることは思えない。逆に一緒にやつたのなら、どんなものになるのか、すぐ見てみたいと思つ。

また違和感を感じながら、これも記憶違いかなと思つた。無かつたことにされているけど、実はちょっと撮つたぶんがあつたのかも知れない。

自分もけつこう適當だなあ、マニアつて良く知つてゐなあ、と思いつつ聞き流した。

そのうち自然と会話も途切れで、おっさんは出でていつた。

そこで、ようやく、今日の『トローン』みたいに、流出版が造られてたりするのかも知れないと気づいたわけ。

いちおう聞いておきたいと思つて、劇場を出てきよりきよりしてたら、裏路地に入つていくおっさんが見えた。

んで、急いで走つていつて、おっさんの背後から声を掛けた。

ここから先はちょっと、信用してもらえないかも知れない。

怪奇現象とかは基本信じない俺なので、なんつーか、自分でも、自分が見たのが本当にあったことだったのか、ちょっと信じられない。

おっさんはゆらゆらした足取りで、暗い路地の奥へ歩いて行っている。  
声を掛けても返答がないので、肩を叩いてみた。

そしたら。

ゆらぐつと振り返ったおっさんの顔が、「死んだ牛」の頭だったわけ。

文章で書くと、ばからしいけど、実際、体験してみると、もう…

いま冷静になつてみても、まだ怖い。

ピカソとかの描いた牛頭に少し崩れた腐肉をくつつけたような感じ。

片方の眼窩はぽつかりと開いていて、もう片方にはビリビリとした死んだ目が揺れている……。

なんか叫んだような気はするし、走つて逃げた気はするけど、正直、その後のことあまり覚えてない。

気がつくと、駅の改札について、既に始発が近かつた（あたりはまだ薄暗かったけど）。

怖くて仕方がなかつたので、速攻で改札を抜けて、電車に走つた。心臓ばくばくだったものの、誰かに話しても信用されそうにない。また戻つて確認したくもない。

電車が入つてきてからは追いかけてきていなか、立つたまま見

ていたけど、特に何もないまま。そのうちに電車が動き出した。ぐつたりしながら家に帰り着いて、寝ようと思つたけど、寝られない。

結局、誰にも相談しないまま何日か過ぎて、これを書いてみたわけだ。

調べてみて、判明したこと。

- (1)『アンダルシアの犬』に出てくるのは、やはり「死んだ口バ」で、「死んだ牛」じゃない。
- (2)『デューン』ホドロフスキ版は、やはり存在していない。
- (3)『スターウォーズ』バー・ホーベン&リンク版も、やはり存在していない。

と、すると、あの日の出来事はいったい何だったのか。  
映画の幽霊？ そんなまさか。俺の「妄想」？ それは非常に困る（笑）。

そのどちらでもないとしたら、何なんだろう？

そう考えていて「死んだ牛」というキーワードで、ふつと思いつ出したことがあった。

死んだ牛、DEADBEEFか、なるほど……。

昔のコンピュータプログラミングで、そんな「数値」を使うことがあつたらしい。

コンピュータは基本、十六進法なので、0123456789までの数字とABCDEFのアルファベットで数字を書く。その時、ABCDEFだけで（つまり数値だけで）書くことができる言葉の一つが「DEADBEEF」＝「死んだ牛」なのだ。

IJのキーワードは「デバッグ」する時に使われる。「データの中に一種の標識としてDEADBEEFという値を書き込んでおくと、後からそれを検索して、目的のデータを探し出すことができるわけだ。

そこで連想したのが「シミュレー・テッド・リアリティ」という仮説だ。

非常にIJF的なのが、「IJの世界は実在しているのではなくて、巨大なコンピュータの中でシミュレー・シヨンされている、仮想現実なのだ」という説だ。

ばかばかしく思えるかも知れないが、実は真面目に検証しようとしている科学者もいる。宇宙は巨大な量子コンピュータだ、という説は実は既に証明されているし、意外と突拍子もない説ではないのだ。

『マトリックス』なんかも、そういう仮説があつたからこそ作られた映画だつたりする。

しかし、その説を唱える人も見落としている点がある。

つまり、世界がプログラムされたものだとしたら、それをプログラムした何者かがいる、ということだ。

そして、現実世界のプログラムを考えてみれば一目瞭然だけど、プログラマーで「バグ」を出さないやつは決していないだろう。

とすれば、この世界にも「バグ」は潜んでいるんじゃないだろうか。

俺が遭遇したのも、そんな「バグ」の一つだつたのかもしれない。例えば、あのおっさんが。

で、外の世界の誰かが「DEADBEEF」を頼りに、その「バグ」を見つけ出し、修正してしまつたんじゃないだろうか。

だから、今から調べたら『デューン』も『スター・ウォーズ』も無

かつたことに、なつてしまつて いるのだ。

ひょっとしたら、今まで俺がさんざんバカにしていた超常現象とかも、そういうものなのかも知れない。

それを体験した人はたしかにいて、でも、後から調べると、痕跡は修正されてしまつて見つからない。そういうことなのかも知れない。

俺も少し信念を曲げた方がいいのかも知れない。

でも、まあ、「超常現象」世界のバグ説」なんて唱えても、さらなる変人扱いされるだけだろ?……。

日記に書くくらいが、一番いいのだ、きっと。

ああ、それにしても『デューン』は良かつた。『スターウォーズ』版も見たかった。

しかし、現実つていつたい何なんだろう。

この物語はフィクションです。実在する人物・団体・事件などにはいつさい関係ありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4224m/>

---

すべてが死んだ牛になる -The Imperfect Outsider-

2010年10月28日07時27分発行